

新庄市議会議員行政視察報告

会派名 絆の会

(全体事項)

- 1 視察日程 平成28年7月19日(火)～21日(木)
- 2 調査事項 <視察先>
 - ① 学校の跡利用について 登別市 北海道
 - ② 道の駅 you 遊 もり 森町 北海道
 - ③ ふるさと納税について 八雲町 北海道
- 3 視察参加議員 (議席順)
今田浩徳 清水清秋 新田道尋 森儀一(代表)

(具体的事項)

I 札内高原館 地場産業振興と拠点施設について(登別市)

視察日時 平成28年7月19日(火)

午後2時00分～午後4時00分

説明者	登別市議会議長	天神林美彦
	観光経済部農林水産グループ	総括主幹 西本利博
		主幹 佐々木鉄雄
		主査 打田知之
	議会事務局総務グループ	総括主幹 上野雄司
		担当員 藤原雅也

(視察事項)

地域の紹介

昭和45年8月に市政が施行され、面積212.21km²、人口49,630人(H28.3現在)の有する市です。また、年間390万人を超える観光客が訪れる全国有数の観光地でもあります。面積の73%を森林が占め、豊かな緑に恵まれ、酪農、畜産を主体に生産する農業から観光産業と結びついた体験型農業も増えています。交通の利便性や良好な居住環境を生かして企業誘致活動もと、幅広く厚みのある産業構造の形成を進めています。議会に於きましては、議会改革に積極的に取り組み議会基本条例を定め、併せてIT推進を図り全国からの議会視察も多いとのことでした。

視察所感

廃校の再活用、リニューアル、地域還元等廃校舎を取り巻く施策は自治体にとって課題になってきています。登別市においても同様でありましたが、利活用に取り組まなければならない時に各部局との検討はもちろん、市民からの要望に応えるなど集約をしっかりと行い納得のいく活用がされており、現在では収益を上げており地域に根ざした産業として高い評価を受けていました。

人口減少に伴う影響は当市にとっても各方面にあり、市所有の施設の活用については今後課題になってくる施策になります。登別市の取り組みを伺い参考になる点を吸収し、形は違うにしても近い将来に備えるべきではないかと感じました。

実績効果

平成2年に農業振興研究会が設立、農業所得向上、ゆとりある農業経営、活力ある農村の確立を目的にし、活動の場として10年から147,654千円をかけて改修し札内高原館が12年にオープンしました。加工研究と体験学習、施設管理を委託され4月にスタートしましたが、当時はソーセージ、チーズ、アイスクリームの商品化に向けた研究開発をして、技術提供や試食会をする程度で製造販売施設には至らずの考えだったようでした。

目的が達成され事業経過が良好という後押しもあり、製造施設の認可を取り付け、文科省の廃校リニューアル選とアピールする機会を逃さず起業し有限会社となり、起業化支援事業の支援を受け安定生産の基礎を築きました。乳製品の加工生産、技術向上に努め、地域内外に理解を広めた結果、各種評議会の賞も数多く受賞しております。更に、ブランドの確立と併せて地元学校給食へ牛乳を提供するなど安定的な経営を続け、21年には株式会社と商号変更を行い、現在に至っております。

収入を支えるのは地元の小中学生をはじめ市民と登別ブランドを利用する全国の方々、そして観光客。市の戦略に市民が呼応する形で事業が展開しており、市内を歩けば商品が陳列されており一体感を感じました。

評価課題

市内から離れた地域にあった学校を活用し企業する際地域の希望にどう応えて行くかが最初の課題とのことでした。パブリックコメントも含めかなりの回数と時間を費やしたようであり、それが成功の秘訣とも

思いました。慣れ親しんだ施設が変わる抵抗感はどうして和らげていくか、新たな施設の活用に主眼が置かれ計画施行が進む時代の中で提示された課題です。

登別市は、加工施設によってブランドの確立を図り良質な商品を提供することでPRができ、農産物の販売拡大につなげました。当市に於いても多くの農産物があります。拠点をつくり、ブランド戦略を立て打ち出すべきと思います。施設再活用が起点になる可能性を考慮しながら農業振興を進め、地域活性と併せて市民が納得する施策を講じ、参画しやすい環境を構築して行くことを願います。

II 道の駅 YOU・遊・もり（森町）

視察日時 平成28年7月20日（水）

午前11時30分～午後1時30分

電車以外で函館から札幌へ向かうには国道5号線を利用するのが一番いい方法で、沿線には多くの道の駅が点在し、旅行者をはじめ運転者を景色や地場産物、充実した施設で誘います。YOU遊もりも国道沿いの立地と函館から最初の道の駅という好条件、また海が一望できるロケーション、そして何より誰もが知るいかめしという特産物があるのが一番の目玉で、北海道の道の駅ランキングでも上位に位置します。地元農産物と海産物だけを取り扱い、町のPRを施設全体で行い、周辺地域と併せてイベントも開催し集客を維持していました。食事メニューも多く各年齢層に対応する姿勢が伺えました。第三セクターの運営のため人材確保や商品管理などにやや難があるらしく、体制の構築が課題とのことでした。

以前視察した2件の道の駅は株式会社制をとり独自の運営形式を確立していましたが、この度その違いを見ることができ、今後の道の駅構想に役立つ助言ができるのではないかと考えています。近い将来、交通網の要所である当市にとって道の駅の必要性は重要で、利便性の高い道の駅を作らなければなりません。どのような設置法が良いのか皆で考えて行く上でも更なる見聞を広め対応して行きたいと考えます。

Ⅲ ふるさと納税（八雲町ふるさと応援寄付金）について（八雲町）

視察日時 平成28年7月21日（木）

午前10時00分～正午

説明者	八雲町議会 議長	能登谷正人
	八雲町企画振興課長	萬谷俊美
	企画振興課 企画係長	南川達哉
	企画振興課 企画係	菊池貴志
	八雲町議会事務局長	山田耕三

（視察事項）

地域の紹介

平成17年10月1日に旧八雲町と旧熊石町が合併し八雲町が誕生し、合併により二海郡と言う新たな郡名がつけられました。

日本で唯一、日本海と太平洋を持つ町で面積、956km²で、農業、漁業ともに恵まれた立地となっており、太平洋、日本海を望む景観と内陸部の牧歌的な景観は、訪れる人の心身を癒す地となっています。

人口 17,342人 世帯数 8,607戸 （6月末現在）

視察所感

全国の自治体に取り組むふるさと納税はPRによって大きな差が開いています。この度視察を行いました八雲町においては、地域の実状を把握しニーズを調べ、産業活性化に結び付けており、また、町の総合計画に基づいた事業へと、八雲町ふるさと応援寄付金条例を制定し寄付の用途指定を受けて寄付金を受け入れ充当していました。20年4月制度導入以降、25年までは町内外併せても10～17件で推移していました。26年に1万円以上の寄付をした町外寄付者に対して記念品の贈呈を始め、申し込みが一気に4,000件を超える実績となったのは、物産館の丘の駅を通じて特産品の送付をしていたのを12月より寄付金の代行サービス業者（株）さとふる）に一部の事務を委託し並行して実施を



始めたため、現在も、安定した寄付金の申し込みが続いているようです。返礼品（記念品）は町直営をAコースから、さとふる利用をBコースからと区別し、納税業務フローを構築し申し込みし易い環境を提供しており、特に入金方法に関しては金融関係機関はもちろんコンビニ携帯会社の決済など窓口を広げて対応しておりました。27年度の実績で件数が32,416件、総額340,808,043円で、LED街路灯設置助成事業など57の事業に活用して行くとのことでした。

実績効果

税収入の増額が見込めない中で、独自の事業を推進、展開していくには重厚な街づくり計画と市民の理解と協力が必要不可欠です。魅力ある地方自治運営を継続していくためにも自分たちの魅力を多くの方々に理解して頂く必要があります。その手段として地場産業や農産物が注目され、ただ売るのではなく返礼品として町を売り知っていただくこと、八雲町はその有利な立地条件を生かし町内外に発信を続け、応援者を増やし、リピーターも増やしています。

産業構成上1次産業を活かした食品製造業が主要な2次産業であり、また、小売り、飲食、サービスが4割近くと3次産業も安定した商業圏を築いており、寄付者増に対応すべく返礼品確保が整っておりました。産業分野育成に力を注ぎ寄付金の還元を見ることができました。

評価課題

平成20年に始まったふるさと納税事業は、27年の税制改正により控除される限度額が2倍に拡充されたことで各自治体の努力も相まって寄付金額が増加しました。その努力ややり方次第で何倍にも増やした自治体もあれば、変化のない自治体もありますが、その取り組みに注目が集まります。

当市に於きましても、米、和牛生産基地として5千万円を超える寄付を頂いています。現在登録している「ふるさとチョイス」は登録自治体が多く、寄付者が山形新庄にヒットするには興味をそそるPRが必要で今以上の努力を要します。また返礼品の産品が多くばらけて様々興味を持っていただくのは良いのですが、農産物以外の産物の組み合わせなど再考する等今後に向けて検討すべきと考えます。

ふるさと納税制度が継続されて行くのかもありませんが新庄

市のPRや応援団の増加に向け独自の制度を設けてもいいのではないのでしょうか。6次産業の推進、民芸工芸品の育成等確立して行く機会と捉え産業発展の一翼となるようにしていきたいものです。